

## 発達障害を有する子どもの「食の困難」の実態と支援ニーズに関する研究 —発達障害の当事者調査から—

○田部 絢子（大阪体育大学） 高橋 智（東京学芸大学）  
Keywords：発達障害、食の困難、当事者調査

### 1. はじめに

食物アレルギー・生活習慣病・摂食障害など食に関する多様な困難・ニーズを有する児童生徒が増加し、学校における食に関する指導と対応の充実は重要性を増している。なかでも発達障害児者は、感覚情報調整機能障害（感覚の過敏・低反応）や身体症状（身体の不調・不具合）などの身体感覚・身体問題、あるいは無理解・不適応に伴う不安・緊張・ストレス等に起因して、食物・料理・食器具・食事環境に関する過敏性、極端な偏食、異食、肥満、アレルギー等の様々な困難・課題を有するために特別な配慮や支援を要することになりやすく、きわめて多様な「食の困難」の様相を呈している（高橋ほか：2015、田部・斎藤・高橋：2015）。保護者にとって子育てにおける不安・ストレスの要因にもなっている。

諸外国における発達障害者の食の困難に関する研究動向では、近年ようやく ASD と食物選択性（偏食）の問題に関心が向けられ始めていること、食物選択性（偏食）の背景として感覚過敏性が指摘されていること、ASD の食物選択性（偏食）が家庭の大きなストレスとなっていることなどが示されている。しかし、その調査対象は保護者が大半であり、また当事者が対象の場合でも当事者調査研究の方法論を用いていないために、当事者が抱える食物選択性（偏食）、感覚過敏性、不安・恐怖・ストレス等のリアルな困難・ニーズを明らかにできておらず、それゆえに具体的な支援を提案できていない（NHK おはよう日本：2017、NHK WORLD：2017）。

同様に、日本においても発達障害当事者の発言・手記以外に質的研究はいくつかなされているものの、全体像を把握するための実証的研究はまだ少ない。食の問題に関しては個人差も大きいことから、発達障害者の食の困難の実態や支援ニーズを丁寧に明らかにしていくことが必要である。本報告では、発達障害児の食の困難の実態や支援ニーズを、発達障害を有する本人への質問紙調査を通して明らかにすることを目的とする。

### 2. 方法

①調査対象：発達障害（ASD、LD、ADHD 等）の診断・判定を有するあるいはその疑いがある小学生～青年の方で、自身の食・食行動の問題について幼少期～18 歳以前を振り返って記述が可能な方。教育系大学で発達障害教育関係講義を受講している学生にも同様の質問紙調査を実施し、結果を比較検討した。

②調査内容：「食の困難に関するチェックリスト」（〈身体の構造と食物〉摂食中枢、感覚器系、消化器系、循環器系、免疫・アレルギー、〈食生活嗜好〉食量、食べ方、〈食事と環境〉食卓用品、場所、人、状況）。さらに「身体・生活・食事の状況」、「食に関する困難と対応」に関する項目を設定した。

③調査方法：質問紙調査法（郵送または直接配布）。「食の困難に関するチェックリスト」は、刊行されている発達障害者本人の手記をほぼ全て検討し、食に関してどのような困難や特有な感覚の問題を抱えているのかを把握して作成した『食の困難・ニーズに関するチェックリスト』（全 306 項目）により 2012 年に実施した調査結果を再検討して作成した。発達障害の本人、発達障害支援関係団体などの協力を得ながら質問紙調査を実施し、発達障害の本人が記入できない場合は、本人の意見を聞き取りながら保護者等が代筆することを認めた。

④調査期間：2016 年 12 月～2017 年 5 月（実施中）。発達障害の診断・判定を有する本人 73 名、教育系大学で発達障害教育関係講義を受講している学生 115 名から回答を得た。

⑤研究倫理上の配慮：個人情報保護法および日本特殊教育学会・

所属大学の研究倫理規定に基づいて調査を遂行した。インフォームド・コンセントの原則に立ち、調査協力者には「調査目的、調査責任者・連絡先、調査結果の利用・発表方法、秘密保持と目的外使用禁止」について事前に説明し、了解を得ている。

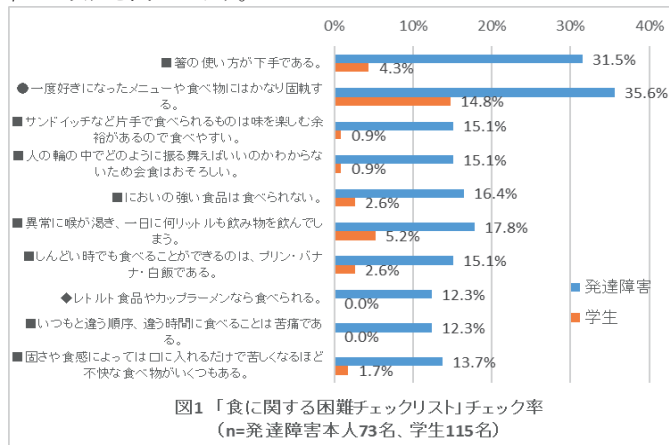
### 3. 結果

回答者は発達障害者本人 73 名、学生 115 名である。回答者の有する障害種と診断の有無を表 1 に示す。

表 1 回答者の障害種と診断の有無

	障害種（重複あり）						診断			
	LD	ADHD	ASD	知的障害	その他	疑いなし	n	有	無	n
発達障害	15	22	36	18	11	0	73	53	13	66
	20.5%	30.1%	49.3%	24.7%	15.1%	0.0%	100.0%	80.3%	19.7%	100.0%
学生	0	1	0	0	3	110	115	3	112	115
	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	2.6%	95.7%	100.0%	2.6%	97.4%	100.0%

「食の困難に関するチェックリスト」の平均チェック数は発達障害者本人 10.0 個、学生 3.1 個であり、中央値は発達障害者本人 6.0 個、学生 2.0 個である。 $\chi^2$ 検定の結果、有意差がみられ、発達障害者本人は特有の食に関する困難を抱えていることが明らかになった。具体的な困難は、発達障害者本人と学生のチェック率の差が大きい上位 10 項目を図 1 に示す。



### 【文献】

NHK おはよう日本：「子どもの“偏食”実態明らかに」2017 年 4 月 5 日、<https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2017/04/0405.html>  
NHK WORLD：「Overcoming fear of food」, Apr. 18 2017, <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/newsroomtokyo/aired/20170418.html>

田部 絢子・高橋 智（2015・2017）『発達障害児者の「食」の困難・ニーズと支援に関する調査研究調査報告書』第 1 報・第 2 報。

田部 絢子（2016）発達障害児の食に関する困難・ニーズと支援、『SNE ジャーナル』第 22 巻 1 号、pp.22-37。

高橋 智・斎藤 史子・田部 絢子・石川 衣紀・内藤 千尋（2015）発達障害者の「食」の困難・ニーズに関する研究—発達障害の本人調査から—、『東京学芸大学紀要総合教育科学系 II』66。

【附記】本報告は、①三菱財団「第 45 回三菱財団社会福祉事業研究助成」、②飯島藤十郎記念食品科学振興財団「平成 26 年度学術研究助成」、③博報児童教育振興会「第 9 回研究助成継続助成（アドバンスステージ）長期」、④平成 28 年度科学研究費補助金（若手研究 B）、⑤マリア財団「平成 28 年度研究助成」（いずれも研究代表者：田部）による研究成果の一部である。

(TABE Ayako, TAKAHASHI Satoru)